

研究発表

梁塵秘抄と変文の関係についての一考察

The Study on the Relations between
Ryojin-hisho and Henbun

翁 蘇 倩 卿*

I have studied Mr. Kamo Chiyomei's *Hojoki* for years and published a book and two papers between 1978 and 1979. This study provides me some ideas about the characteristics of the Japanese Medieval literature. During studying the situation of the tenth century, a thousand years ago, we find a fact: The Chinese culture much influence upon the literature of Japanese Medieval Age.

Nevertheless, there were ravages of war in T'ang Dynasty, so many products of Chinese culture were buried for many years. In early Summer of 1899, a total of twenty thousand books were found in Ch'ien Fo Cave in Tun Huang. Because of this discovery, many problems concerning Chinese literary history can be solved.

I have always thought that the publications of the so-called "Setsuwa-bungaku" in Japanese Medieval Age have some relationships with the "Buddhist literature" of the Continental literature. Now when I read more about "Buddhist

* Wung Su Chien Ching [現職] 淡江大学教授

classics”, which have been founded in Tun Huang and have been highly regarded by the academic circle, my thought becomes more stronger.

The reason why I work for this paper is that I find the Ryojin-hisho seems to have any trace of the folklore literature and Kosho-bungaku. In Summer, 1980, I took a chance to pay a visit to the Stanford University and the Princeton University of the United States to wade into some books about Henbun. Therefore, I have more confidence in my opinion to deliver this paper.

1. 俗文学

胡適の名を知らない人はいないと思いますが、中国白話文学の提唱者胡適はこう言っています。

中国文学史上何嘗沒有代表時代的文学？但我們不應向那「古文傳統史」裏去尋。應該向那旁行斜出的「不肖」文学裏去尋。因為不肖古人、所以能代表当世。 (『白話文学史』引子 第4頁)⁽¹⁾

中国文学史上には、時代を代表し得る文学がないとはいえない。但し、われわれはそれを「古文傳統史」の中に尋ねるべきではない。それは旁系斜出の「不肖」文学の中に尋ねらるべきである。これら「不肖」なる古人こそ、もっともよく当世を代表し得るからである。と、『白話文学史』に言っています。時に3・4篇の市井の間に発した作品が、往往にして一千部百部の詩集・文集よりも、時代精神・社会生活・民情・政情を如実に反映しているということもまた事実であります。

近年、中華民国に於て通俗文学が見直され、「中国俗文学史」が統統巷間に

問われています。それも敦煌出土の変文の発見に刺激され、力を得たためだ
と思います。

抑も、六朝の志怪小説、唐代の伝奇小説はすべて文言文で書かれていまし
た。それが宋の時代に急に白話小説や歌曲が出て来たのであります。宋朝以
後民間に盛んに流行した話本・諸宮調・宝卷・彈詞・鼓詞、これらの俗文学
は白話（はなしことば）で書かれています。しかも散文と韻文が入りまざっ
て出て来ます。このような文体は唐以前の中国にはなかったものです。一千
年来中国文学史上に説明のつかないブランクがここにできておったのであり
ます。つまり中国俗文学の来源を明らかにすることができなかったのです。

それが敦煌から発掘された「変文」によって、すべて明らかにされました。
唐代に印度文学の影響をうけて、変文という文体が発生していたのです。

2. 変文とは？

変文とは中国に発生した講唱文学です。唐以後の講唱文学・俗文学の源流
は変文でした。変文とはいささか変った名称ですが、文学史にこう言ってい
ます。

所謂変文之変、当是指變更了仏經の本文而成為俗講之意。後來変文成了
一個專稱。便不限定是敷演仏經之故事了。或簡稱為變。

（『中国俗文学史』鄭長樂著）⁽²⁾

変文の変は仏典の本文を変更して話し言葉に書き換えたもので、一般大衆
に布教するための俗講に用いられた。俗講とは、白話で一般俗人に分かるよ
うに仏典を説き聞かせる説教のことで、変文はそのテキストであったわけ
です。始めの目的は仏教を弘めるために教義をはなしたのですが、後には大衆
にアピールするように巷間の伝説や人情ものまで語るようになった。そう
いうのもひっくるめて「変文」と呼んでいる。或いは簡略して「変」といっ
た。のちに変文は學術用語上の個有名詞となった。はなしの部分の散文と唱
いの部分の韻文が入りまざった文体が変文である。

変文は唐の時代に始まる。盛唐玄宗皇帝より前には変文はまだ出ていない。変文の文体は散文と韻文から成っている。中国では唐以前にはこういう文体はなかった。印度文学の影響を受けて発生した文体である。

変文的来源、絶対不能在本土の文籍裏找到。我們知道印度的文籍很早的便已使用到韻文散文合組的文体。……中略……一部分受印度仏教的陶冶的僧侶、大約曾經竭力的在講經的時候模擬過這種新的文体、以吸引聽衆的注意。得了大成功的文淑或文叙便是其中的一人。

(『中国俗文学概論』楊蔭深撰94頁13行) ⁽²⁾

変文の来源は、これを本土の文籍の中に求めることは絶対にできないことで、われわれは印度の文籍に早くからこの韻文散文合体の文体が使用されていたことを知っている。一部の印度仏教の陶冶を得た僧侶が、寺院で説教の時にこの新しい文体を用いて聴衆の注意を引いたのが中国に於ける変文の始まりであった。これが大衆に受けて変文は空前の大流行を来すのである。唐の段安節^{がふ}の楽府雜録に「長慶中、俗講僧文敍善吟經、其声宛揚、感動里人」⁽²⁾とありますが、当時長安に留学していた日本僧円仁(794~864)の著『入唐^{にっとう}求法巡礼行記』にも、

城中俗講、此法師為第一^ト

(入唐求法巡礼行記 円仁著) ⁽³⁾

と、記されています。円仁はまた唐に於ける俗講(通俗的な説教講釈)の盛んなさまを、その巡礼行記に、

開成六年正月九日五更時、(天子)拜南郡^ス了、早朝^{リニ}帰城、幸在丹鳳樓^ス、改^ム年号、改^{メテ}開成六年為^ト会昌元年^{イタシテ}、及^レ勅於左右七寺開^ニ俗^ク講^ヲ。左街四处、…右街三处。

(入唐求法巡礼行記 円仁著) ⁽³⁾

と書いてあります。又会昌2年正月1日の条には、

家家立^ニ竹杆^ニ、懸^ニ幡子^ニ、新歲^ル祈^ヲ長命^ニ、諸寺開^ニ俗^ク講^ヲ。

(入唐求法巡礼行記 円仁著) ⁽³⁾

4年4月23日の条には、

天子在御樓冊尊号、諸司軍兵馬排隊樓前、百寮僧門道士班列、宰相進尊
号、五月、奉勅開俗講、兩街各五座。

(入唐求法巡礼行記 円仁著)

このような円仁の記述は唐代の政治・社会・宗教を再現させるものとして、最も信頼のおける史料として世界的に重視されています。俗講は布教のためばかりでなく、天子の開元・冊号・新年の祝い・長寿の祈願・或いは病患の治癒を祈る諸行事としても開かれたのであります。このように世俗の衆生に經典を講釈したのが俗講であり、俗講に用いたテキストが変文であったのです。

3. 変文の支流

このように唐代を風靡した変文も、知らず知らず民間の嗜好に投じて姪靡の風に走るものが出たので、宋の真宗の時代(998～1022年)に禁止されます。当然寺廟で変文を講唱する俗講も禁止されたのであります。

これより変文はその名と姿を隠してしまいます。その時に一部が敦煌の千仏洞に封じ込められたのでしょうか。このように変文は一千年位前に遁跡し姿を消したのですが、その支流は深く民間に流れ込み、現代まで生きつづけて来ていました。

宋の時代「瓦子」といわれる今でいえば遊芸場ですが、こんな処で、「説経」「説参請」とかいう名義で仏教の故事を街の中で説き唱った場所があります。禁止された変文の俗講は、寺を離れて街中の遊芸場に現われることとなったのです。

説経、謂演説仏書、説参請、謂賓主参禅悟道等事。

(宋 耐得翁 都城紀勝 瓦舍衆技 説話四家) ⁽²⁾

説経とは仏書を演説することをいい、説参請とは主客が共に参禅して悟道することであると説明されています。これは変文が姿を換え、その名も宝卷

と呼ばれる形で民間に生きていた証言であります。変文の支流というべきでしょう。

変文の支流の中で仏教教義を扱わないものに「諸宮調」があり、これは民間に深く入り込み、極く厚い層の享受者を擁しました。

諸宮調は宋代的唱詞、它的体裁頗似唐代的変文、也是韻文和散文合組、不過韻文部分、並不是用七字句、乃是用各種曲調、長短不一。所以它的祖流是變文、母系却是唐宋的曲調如大曲之類。

(中国俗文学概論 楊蔭深撰 99頁 3 行目) (2)

諸宮調は変文と同じ体裁で散文と韻文の合体から成っている。ただし韻文の部分は各種の曲の調に合せて歌ったので、必ずしも7字1句でなく、長短不一である。用いられた曲調(譜のこと)は大曲の類であった。

梁塵秘抄口伝集巻第十に

……初積・大曲・足柄・長歌を初めとして、様々の声変はる様の歌、田歌に至るまで、記し了はりぬ。

(梁塵秘抄 岩波古典大系本 442頁第2行目) (6)

と出てくる大曲と、宋代諸宮調の採用した大曲とは同一のものであったろうと思われます。中国で早く散失した作品が、日本に招来されて残っていることは他にも多くの例があるので、梁塵秘抄所収の謡いものの中に、中国の大曲の曲調が流れ込んでいることは容易に考えられることです。秘抄は1169年成立ですが、あたかも宋・金・元の時代に、彈詞・鼓詞が盛んに流行した歴史的事実と符号します。『平家物語』もこの流れを汲んだ作品でありましょう。宋の陸游の詩に、

斜陽古柳趙家莊 負簪盲翁正作場

(中国俗文学概論 楊蔭深撰 110頁 4 行目) (2)

と鼓を背負った盲の翁が夕方の趙家莊という村で、弾き語りをしていた光景を歌っています。ここにでる古柳は古い柳の大木の下で、という意味なのか、梁塵秘抄に出てくる古柳34首という古柳と関係があるかどうか分かりません。

諸宮調は民間に広がり、福建省あたり南方に定着したのを「弾詞」といい、
広東地方にとどまったのを「木魚書」といい、北方諸省に流行ったのを「鼓
詞」といいました。「弾詞」は琵琶を主楽器とし、「鼓詞」は鼓を主楽器とし
ました。「弾詞」の曲本を広東人は「木魚書」といいました。これは忠孝節
義を唄ったもので、妓楼の妓女が死を以て情に殉じた話とか、下僕が主人に
代って刑を受けるとか、孝女が父に代って贖罪したとかいう内容のものばかり
で、しかも広東方言であるために遠くに伝播されなかったと一般に思われ
ていますが、比叡山の魚山は山中になお、魚の字を用いたのは声明の来源を
木魚書に仰いだ意味をもたせたのでしょうか。とまれ、これら変文の支流は
宋以後民間に盛んに行なわれたが、いつ、どういう風に発生したのか、その
源流が何であるか不明で、一千年来疑問にされつづけていたのであります。

4. 変文の発見

変文の出現によって中国宋代以後民間に盛んだった講唱文学の来源が明ら
かにされたのは70年位前のことでした。

1907年5月20日、ハンガリヤの地理学者スタイン (A. Stein) がイギリス
印度政庁の命をうけて、中国甘肅省敦煌という街の近くの鳴沙山^{めいさざん}という山、
そこの莫高窟という俗に千仏洞と呼ばれている石窟寺に至り、住職の王道士
に酒手をやって秘密に24箱の写本と5箱の図画刺繍その他を買い取ってロン
ドンに運びました。

同じ頃、フランスのペリオ (P. Pelliot) は当時仏領印度支那のハノイに
ある極東学院正しくは遠東博古学院の教授であったが、フランス政府の命を
うけて、中央アジア探險に来て、1907年12月に敦煌に至り、これまた巧く王
道士を買収して、スタインの遺して行った古書数千巻を手に入れ、フランス
へ送りました。ペリオは5月に敦煌を発って途中西安に1カ月滞在し、鄭州
を経て10月の初めに北京にやって来て、この古書の一部を中国の学者に見せ
た。これが中国や日本で敦煌古書に注意を引くようになった最初である。清

朝末光緒35年、日本の明治42年でありました。清国政府でも遅ればせながら、千仏洞に残っていた古書を全部北京に運ばせた。が貴重なこれら七千巻に及ぶ古書は只今では大英博物館に収められている。パリの国民図書館には千五百巻、北京図書館には四千八百八十八巻所蔵されている。近年これら古書はマイクロフィルムに撮影され、各国の図書館に配布されている。東京の東洋文庫にも所蔵されているはずです。

敦煌古書の中には社会経済史・法制史に関する文書も多く、この方面の研究を盛んならしめている。これら古代社会学上の新開拓が促進された外、文学史料としては俗文学の資料が多く出た。その中に変文が出土したことによって、唐代に発達した変文がその全貌を明らかに現出し、宋代以後の宝卷・諸宮調・彈詞・鼓詞の来源が変文であったということが分りました。中国文学史に大きな解決を与えることができたのであります。

変文はのちの研究にゆずることとして、変文というتماز私の頭に閃いたのは『梁塵秘抄』であります。

5. 梁塵秘抄

梁塵秘抄は現在発見された部分は「梁塵秘抄卷第一・梁塵秘抄口伝集卷第一」「梁塵秘抄卷第二」「梁塵秘抄口伝集卷第十」の3類に止まり、『本朝書籍目録』に、「梁塵秘抄廿卷後白河院勅撰」とあるに徴すれば、現存本は本来の僅か20分の3にしかないということが推定される。これは貴重な作品であるから、或いは変文のようにどこかのお寺に封じ込められているのではなかろうか。当時は写経をしても往生が遂げられると信じたし、今様を唄っても病気が癒ったのである。後白河院は今様の功德について、

此の今様、今日ある、一つにあらず。心を致して神社・仏寺に参て、謠ふに示現を被り、望むこと叶はずといふこと無し。官職を望み、命を延べ、痴をたちどころに止めずといふこと無し。

(岩波古典大系本 梁塵秘抄口伝集卷第十467、468頁)

と、実例を6つ挙げて証明してられる。敦家左少将は神楽朗詠今様に堪能なる名人であったが、熊野に参りて施芸せる時、声めでたき故に御獄に召されて御眷属となった。目井は清経病患いし時「像法転じては薬師の誓ひぞ頼もしき一度御名を聞く人は、萬の病無しとぞいふ」と謡ってたちどころに病が止み、左衛門督道季が瘡を患ってこじらせた時も今様を謡って発汗して瘡がとまった。頸に痘のできた人、目盲いたる者も今様を他念なく謡って痘がつぶれ、或いは目が明いた。今様を謡って往生した遊女のとねくろだの、高砂の四郎君だのが身辺の事実談として挙げられている。このような現世的な功德があるからには民間で盛んにならない筈はない。法皇は当時の世相を記して曰く、

上達部・殿上人は言はず、京の男女・所々の端者・雑仕・江口神崎の遊女・国々の傀儡、上手は言はず、今様を謡ふ者の聞き及び我が付けて謡はぬ者は少なくやあらむ。

(岩波古典大系本 梁塵秘抄口伝集卷第十445頁2行目) (6)

かくして法皇は乙前(五条の尼)始め多くの今様を謡う男女(それぞれ名を秘抄に残されている)を召して民間に散在している今様を採録されたのが、梁塵秘抄だったのであります。中国では、

唱諸宮調的人、也像其他技艺一樣、「衝州撞府」到处説唱。而且唱的不僅是男人也有女子。

(中国文学概論 楊蔭深撰 100頁3行目)

衝州撞府とはあちこちの町や村を渡り歩いて糊口を得るために歌い歩いたというのであります。

鴨長明の『無名抄』にもこのような風俗を記述した(27)俊頼歌をくぐつがうたう事、があります。

富家の入道殿に俊頼朝臣候ひける日、かがみの傀儡ども参りて歌つかうまつりけるに、かみ歌になりて、

世の中は憂き身に添へる影なれや

思ひ捨つれど離れざりけり

……………中略……………

永縁僧正、この事を伝へ聞きて羨みて琵琶法師どもを語らひて、さまざま物取らせなどして、わが詠みたる

聞くたびにめづらしければ郭公

いつも初音の心地こそすれ

という歌を、ここかしこにて歌はせければ……………今の敦頼入道（道因）
又これを羨ましくや思ひけむ、物も取らせずして、盲どもに歌へ歌へと
せめうたはせて世の人に笑はれけり。

（『無名抄』 細野哲雄校註 方丈記 157頁3行目）⁽¹¹⁾

と、琵琶法師に謡わせたり、盲どもに歌わせたりしています。かがみの傀儡どもとは雑芸を演じて各地を廻り歩いた賤民のことで、かがみは「滋賀県蒲生郡龍王町のあたりか。」と註されている。梁塵秘抄口伝集巻第十には鏡の山のあこ丸が出てくるが、註には「近江の国の鏡山であろう。」と記されている。この二箇所（或いは同一箇所か）は平安末期鎌倉初期の雑芸（口伝集巻第十には、我独り雑芸集をひろげて……………云々とある。443頁2行目）⁽⁶⁾の家元を指したのであらうと思われます。梁塵秘抄は「嘉応元年三月中旬の比、これらを記し畢はりぬ」と記されてあるから1169年のこと、無名抄は1204年鴨長明出家後の随筆であるから、両者の距たること35年にすぎず、当時の世相を知る資料として比較的近いものと思います。あたかも盲の男女が衝州撞府琵琶歌を弾き歩いた長安の都と、殿上人から端者・遊女・傀儡どもが今様を謡い歩いた平安の都と、殆んど同じ頃の両地の民間の様子が非常に似通っていると思われまいだろうか。

法皇の今様に対するひと方ならぬ御執心は、

そのかみ十余歳の時より今に至るまで今様を好みて怠る事無し。……夏は暑く冬は寒きを顧みず、四季につけて折を嫌はず、晝は終日^{ひねもす}に謡ひ暮らし、夜は終夜^{よもすがら}謡ひ明かさぬ夜は無かりき。……声^{こゑ}を破る事三個度なり。

……或は七・八・五十日もしは百日の歌など始めて後、千日の歌も謡ひ通してき。

(梁塵秘抄口伝集巻第十 442頁)

かくて、承安4年(1174)には9月1日夜から15夜続けて法住寺殿の御所で今様合わせを催されていられる。そのように夢中になられたのも次のような信念があったからであります。

6. 世俗文字の業

法花經八卷が軸々、光を放ち放ち、廿八品の^{ほん}一々の文字、金色の^{こんじき}仏にまします。世俗文字の業、翻して讚^{さん}仏乘^{ぶつじょう}の因、^{てんぼうりん}などか転法輪にならざらむ。

(口伝集巻第十 岩波大系本 469頁1行目) ⁽⁶⁾

ここに、世俗文字の業と仰せられているのは、己に唐土に於ては、難かしい文言文の經典を口語で語り、音楽的リズムに載せて民衆を教化しようとする俗講が流行っていたことをふまえての発言とお見受けするのであります。

さきに述べた『入唐求法巡礼行記』を書いた円仁が承和14年(847)博多に帰着し、斉衡元年(854)には公式承認による天台座主^{ざす}となっている。文徳天皇をはじめとして多くの宮廷人に戒を授けている。

文徳天皇は斉衡2年(855)8月23日の官符に諸国国分寺に派遣される講師・読師の資格を講師五階・読師三階と改めた。(三代格三)

これは長安から帰朝した円仁が唐土の寺院で盛んに行なわれていた俗講の法師(講者)と都講(唱者)の制を取り入れて、このように奏上して改制させたものと思われる。円仁は天台宗系の^{しょうみょう}声明を日本に伝えた『仏教高僧辞典』に見えている。のち良忍^{りょうにん}(良仁ともいう。1072~1132)出でて円仁の伝えた声明を、各流を統合して天台声明を大成した。大原は天台声明の中心地となり、現在に及んでいる。鴨長明の『発心集』にも説教のうまい天台の明^{みょう}賢阿闍利の話が書かれている。行脚の途中、乞われて一時は辞退するが、かねて夢のお告げがあったと言われて、さらば形ばかり申し侍らんと、蓑笠ぬ

ぎ捨てて忽ちに礼盤に上ってなべてならず目出たく説法した、と見えている。私がスタンフォード大学フーバ東亜図書館で見た『敦煌変文集』上・下巻に説教の場面の絵があったが、鐘を鳴らしているのと太鼓を打っているのと2つの絵があり、講者は一段高い段か蓮台に坐している。孫楷第氏の「唐代俗講之科範与体裁」に、

光宅寺法雲^テ於華林殿前登東向高座^ニ為法師^{リテムキノ}、瓦宮寺慧明登西向高座^ニ為都講^{ニル}。
唱大涅槃經^エ、陳食肉者断大慈種義^ヲ。法雲^ニ解釈。輿駕親御地席位^ヲ於高座之北^ニ、僧尼二衆各以列座。

(敦煌石室講經文研究 邵紅著 緒論3より) (7)

とある。長明のいう礼盤は、唐代俗講の高座に登ることと同じである。円仁天台座主となった翌年改製の講師・読師の名称は唐土の法師・都講を模倣したものと考えられる。又梁塵秘抄口伝集卷第十岩波文庫本第455頁3行目

仲頼こそ、……^{としごろ}年来伴僧にてありしかば……責め歌などは悪くも聞こえず。

(梁塵秘抄 岩波古典大系本第455頁3行5行中) (6)

とある伴僧は註には、導師の伴の僧か、随侍して同音した者の意とあるが、『敦煌石室講經文研究』(7)に、

知主持俗講の人物至少有「法師」「都講」「吟詞」三種人。

(敦煌石室講經文研究 台湾大学邵紅著第6頁) (7)

とあるように、法師について説教のとき、吟詞を務めた僧のことを指して言うのであろうか。日本でも唐土の俗講の方式に習った声明教化が行なわれていた形跡が、法皇の記録の中から証実されそうであります。

7. 妙法蓮華經講經文と仏前唱歌と梁塵秘抄

万葉集(巻8)には皇后の宮の維摩講で、市原王・忍坂王の弹琴に合せて田口家守・河辺東人・置始^{はっせ}長谷ら十数人が仏前唱歌1首

1594 時雨の雨間無くな零りそ紅に

にほへる山の散らまく惜しも

を合唱したが、これが日本に於ける声明文学の文献にあらわれた記録の最初であろうか。(759年頃)

『拾遺和歌集』(1005) 哀傷部に行基の作とある

法華經をわが得しことは薪こり

菜つみ水くみつかへてぞえし

は梁塵秘抄 110. 111. 112. 114. 115. 118. 119. 120. 121. 291 の一連の七五調四句の神歌と同じ内容を謡ったもので、敦煌出土の「妙法蓮華經講經文」にその源流を求めることができます。

經…「時^ニ王^{キテ}聞^ヲ聖言^ニ、心生大喜悦^ヲ、即便随^チ仙人^ニ、供給於所須^ニ。採薪^ス及果瓜^ヲ、
隨時^テ供給^ニ与^{スル}。情存妙法^ノ故^{チリ}、身心无^シ懈倦^ニ。」

……………中略

抛 ^シ 却 ^レ 龍樓鳳闕、	不 ^ズ 居 ^セ 王輦帝宮 ^ニ 、
将 ^テ 身 ^ヲ 随 ^テ 逐 ^ウ 仙人 ^ヲ 、	便 ^レ 往 ^ニ 山 ^ニ 中 ^ニ 修 ^ム 道 ^ヲ 。
承 ^レ 事 ^ヲ 不 ^ゼ 生 ^ヲ 疲倦 ^ヲ 、	身 ^ヲ 如 ^ク 僕 ^ノ 從 ^レ 何 ^ニ 殊 ^ニ 、
任 ^レ 從 ^イ 仙 ^ニ 者 ^ニ 指 ^テ 揮 ^ス 、	日 ^ニ 夜 ^ニ 随 ^テ 其 ^ニ 走 ^リ 使 ^ス 。
採 ^ニ 果 ^ヲ 已 ^ニ 充 ^テ 齋 ^ニ 食 ^ニ 、	汲 ^テ 水 ^ヲ 洗 ^レ 鉢 ^ヲ 添 ^レ 瓶 ^ヲ 、
情 ^ニ 存 ^ニ 妙 ^ニ 法 ^ニ 花 ^ニ 經 ^ニ 、	轉 ^レ 更 ^ニ 心 ^ニ 生 ^シ 恭 ^ニ 敬 ^ニ 。
奉 ^ル 事 ^ニ 仙 ^ニ 人 ^ニ 千 ^ニ 歲 ^ニ 滿 ^ニ 、	一 ^ニ 点 ^ニ 殊 ^ニ 無 ^シ 退 ^ニ 敗 ^ニ 心 ^ニ 。

……………後略

(『敦煌變文集』卷五 妙法蓮華經講經文 499頁 8行目) ⁽¹²⁾

110 釈迦^{みのり}の御法を受けずして背くと人には見せしかど、千歳の勤めを今日聞けば、達多は仏の師なりける

112 水を叩きて水掬び、霜を払ひて薪採り、千歳の春秋を過ごしてぞ、一乗妙法聞き初めし

118 昔の仙こそあはれなれ、法華を弘めずなりにせば、人も我が身も今までに、声だに聞かずなりなまし

291 妙法習ふとて、肩に袈裟^{けさ}掛け年経^{かへ}にき、峯に上りて木も樵^とりき、谷の水汲み、沢なる菜も摘みき

(梁塵秘抄卷第二 363頁)⁽⁶⁾

右の3種は何れも、法華經の經典を、その地方の民衆の使用語で朗誦して聴かせる講唱文学であることに於いて性質を一にしています。外にも「難陀出家縁起」^{えんぎ}「維摩詰經押座文」^{ゆいまきつぎょう おうざぶん}など、秘抄中の4句の神歌・2句の神歌と関係のあることを認めましたが、与えられた時間に限りがあるので割愛することとします。気の付いたことは秘抄の2句の神歌が短歌体の^{ていさい}体裁であるのに対し、4句の神歌は七五調を1句とし、4句つづけた長歌の体裁でありまして、これは敦煌出土の変文の韻文が7字句の4句から成る律詩を任意につらねた長詩であるのに酷似しています。

大原には^{よししげのやすたね}慶滋保胤発起の勧学会の堂宇があり、学僧と文学者の交流が保胤の発案で行なわれていた。句題和歌の流れを汲く釈教歌・釈和歌が興隆して、仏寺も従来の閉鎖的な性格を一変して門戸開放に向い、法会が公開され、仏前唱歌・教化讃嘆・声明・和讃が法会に付随して行なわれていた。1012年には選子内親王により『発心和歌集』が撰出され、ついで1013年には『和漢朗詠集』が藤原公任によって撰出されています。公任・赤染衛門・伊勢大輔の歌集には法華經その他の經典の要文を諷詠した作品や、八講・懺法・菩提講・涅槃講・薬師講の説教聴聞に集まったこの人たちの詠歌が散見している。

8. 変文と変相、和漢朗詠集と屏風絵、梁塵秘抄と年中行事絵、日本国現報善惡靈異記と三宝繪

唐代に於て変文と一緒に流行した変相というのは、相即ち図画によって經典の故事を描いて群衆を感動させたものであります。

変文と変相在唐代都極為流行、沒有一個廟宇的巨壁上、不絵飾以「地獄変相」等等壁画的。

(歴代名画記 張彦遠著 中国文学史 449頁6行)⁽⁵⁾

変相とは画のこと。唐の廟宇はその巨大な壁に「地獄変相」などの絵を画

かれないものはなかった。また各寺院で俗講を行なわないところもない。民衆は変相を見せられながら変文を講じるのを聴いたものようである。西域では婦女子が^{えざっし}画冊子の本を見ながら変文をきいている壁画が発掘されている。

京都当麻寺には空海七昼夜参籠し、源信は当院に留まり、聖衆来迎の図を描いている。源頼朝は檀越となり、法華堂を造建している。これは唐土の変相の影響が源信に聖衆来迎図を描かせたのではないかと思われる。

9世紀のはじめに薬師寺の僧景戒が『日本国現報善惡靈異記』上・中・下3巻の仏教説話集を書いており、源為憲が永観2年(984)冬、冷泉天皇第二皇女尊子内親王のために『三宝絵詞』をつくっています。これは漢文脈の『靈異記』を採録して和文にやわらげて書き、絵物語に仕上げたものらしく絵が主で詞は絵の説明の如くつかわれた。

聖徳太子の頃、宮中の采女たち(食事に奉仕した下級女官で帰化人が多かった)が曼陀羅を刺繍している。曼陀羅供は密教で曼陀羅を作製し、供養すること、またその法会をいった。曼陀羅を見ながら説教をきかせる唐土の俗講に似たものであろう。『吾妻鏡』建暦元年10月19日の条に源実朝は、

於永福寺、被供養宋本一切經五千余卷。曼陀羅供。大阿闍梨葉上房律師榮西。讚衆三十口。題名僧百口也。

(『吾妻鏡』)⁽¹⁾

榮西は1191年宋より帰朝した。時の將軍家の恒例の御仏事に講師をつとめた。讚衆は仏前唱歌を務めた読師のことであるらしく、30人も勢揃いをした実に盛大なものであったことが想像される。題名僧は仏の名号を称える僧のことであろう。この外にこの説教を聴いた幕府の高官眷属信者が参列したであろう。円仁の巡礼行記に描かれた唐土の俗講は天子が講師の高台の北に座を設けたもので、それを再現した形のものではなかったろうかと想像される。2年後実朝は入唐の参考のため大師伝絵の銘字の誤謬を^{そうこんぼうこうゆう}莊嚴房行勇に訂正させています。絵は変相で銘字は変文のような間柄であったのかも知れません。実朝は渡宋の志を抱き、建保4年(1216)陳和卿に唐船の建造を命じていま

すので、宋へ渡った時の土産に当地流行の変相に変文をつけたものを用意していたのでしょう。これよりさき1013年に藤原公任撰集の『和漢朗詠集』2巻が出ました。朗詠とは音楽の伴奏によって漢詩文が朗読・朗誦された。うつば物語には「武部丞かうじ（講師）してよみあぐ、^{（諸）}^{（誦）}もろずす」と記されている。詩文和歌の朗詠の方式にも唐土の俗講の様式が取り入れられていることが窺える。楽器には琵琶・笙・箏・笛が用いられた。はじめは貴族階級の詠唱であったが仏家へさらに一般大衆へと流行していき、ついに遊女・白拍子が宴席でうたい、今様化して行った。朗詠は郢曲の一種としての声楽であり、梁塵秘抄には藤家、源家の郢曲の棟梁たる貴族の名が挙げられている。朗詠と今様の関係をあらわす左証である。

『古今著聞集』巻十一、画図部に和漢朗詠集と関係のある屏風絵二百帖の作製のことが記録されている。

又和漢抄に屏風には中局有水をかき、上に唐絵をかき、下にやまと絵を書たりけり。（古今著聞集）

この二百帖の屏風絵は和漢朗詠集中の詩や歌が色紙形に書かれていたという。敦煌絵画資料はロンドン・パリにあり、その壁画は今も千仏洞に残っているが、そのほとんどすべてに色紙形に絵解きが書かれ、もしくは絵解きがかきこまれるべく空白を存している色紙形のあとがあるという。唐土での変相に絵解きの変文が付された伝統をうけついでいると川口久雄氏は書いておられる。さきに尊子内親王お興入れに『三宝絵』を描いて詞を説明に添えたと同じ方式である。少し下って1169年撰集の梁塵秘抄にも抄中の今様歌謡と相照らし合うだけの生動する内容、貴重な描写の見られる年中行事絵60巻の絵巻を後白河法皇は光長らに命じて描かせている。

以上挙げた絵と詞の組合せによる様式の作品は唐土の変文と変相の関係とよく似ていると思える。

9. 今様の起こりと外来帰化人

梁塵秘抄口伝集巻第一に、今様と申す事の起りとて、

用明天皇の御時、難波の宿館に、土師^{はじむらじ}の連といふ者ありき。声明なる詩謡の上手にてありける。夜家にて謡を謡ひけるに、屋の上に付けて謡ふ者あり。怪しみて謡ひ止めば、音もせず。又謡へば、又付けて謡ふに、驚きて、出でて見るに、逃ぐる者あり。追ひて行きて見ければ、住吉の浦に走り出でて、水に入て失せにけり。これは熒惑星の此歌を賞でて化しておはしけるとなん、聖徳太子の伝に見えたり。

(梁塵秘抄口伝集巻第一 岩波古典大系本 440頁) ⁽⁶⁾

と書かれている。聖徳太子伝暦には、

敏達天皇九年庚子夏六月。有人奏曰。有土師連八島。唱歌絶世。夜有人来相和争歌。音声非常。八島異之。追尋至住吉浜。天晚入海者。太子侍側。奏曰。是熒惑星也。天有五星。主五行。象五色。熒惑色赤。主南火。此星降化為人遊童子間。好作謡歌。歌未然事。蓋是星歟。

(梁塵秘抄 岩波古典大系本 441頁頭註) ⁽⁶⁾

熒惑星は赤色をしている。火をつかさどっている。この星が人となって人間世界に降化して子供たちの間にはいって遊んでいたという。歌や謡いをつくるのが好きでよく未来の事を予言するような歌をつくった。蓋し星であろう、ということであります。聖徳太子の頃は、仏像・経論・律師・禪師・造仏工・寺工・瓦博士が百済から献ぜられ、蘇我馬子が法興寺を造営し、聖徳太子も四天王寺を造営されている。建築工が多人数入国していたと思われる。土師は土器作りから葬祭・陵墓などのことをつかさどった氏族であるが、或いは随唐からの帰化人であったかもしれない。これら帰化人が故郷で歌っていた大曲^{だいく}や小曲を仕事を終えた夜のつれづれに歌ったと考えられる。海の方から来たエキゾチックな歌は熒惑星の精が人間世界に下りて、童らにまじって未来を予言して歌ったという神秘的な伝説を生んだのであろう。

文化の交流は常に大衆の力を借りて果されます。特に仏教文化は『涅槃經』に弥陀の心を「等觀衆生如視一子^{スルニヲシルガヲ}」と伝えています。万乗の君も乞食も弥陀

の心には同じ一子に見えるのであります。ありがたい弥陀の功徳を讃仰する声が、印度・西域・中国・韓国を通して、日本の童らや市井の男女の間に広がったのは人間社会に発生し得る極く自然な経路であります。

後白河法皇は大治2年(1127)御誕生、久寿2年(1155)即位、保元3年(1158)8月譲位、二条・六条・高倉・安德・後鳥羽の35年間院政をされた。その間保元・平治の乱、平清盛・源頼朝との政治の争奪、平家の没落、これだけの波瀾怒涛を一天万乗の君主の座にあって国難にあたり、身边には二条天皇(皇子)・六条天皇(皇孫)・建春門院(皇后)・高倉天皇(皇子)御逝去の相次ぐ御不幸に遭遇されながら、御自身弥陀仏の慈悲が唯一の救いであることを身を体して感得されたのであろう。今様を千日も朗詠されたのであり、広く民間にそれを採集し、集大成されたのは、事実を事実として正確に伝えようとされた史学家的な御功績であった。われわれは戦後日本が科学振興の面でその潜在する力を発揮している事実を見ているが、事実を大事にする科学性、日本人の有するこの資質を後白河法皇が如実に顕現されたと改めて見直さずにはられません。

朗詠集についても言えることで、千年むかしの王朝の公卿が取った摘句の手法も注意さるべき現象だと思います。摘句とは絶句や律詩の起承または転結だけを部分摘出して取り上げる方法であります。精選されたものを吸収して、より美しいものを創り上げようとする意欲、それが近代科学文明の接取と再創造にも発揮されて、戦後の経済的飛躍の潜在性原動力となっているのではないかと考えられます。(おわり)

参考文献

- (1) 白話文学史 胡適著 引子第4頁
- (2) 中国歌謡・中国俗文学概論 朱自清・楊蔭深撰 中華民国 世界書局印行
中華民国63年7月 変文92頁、諸宮調99頁、宝巻103頁、彈詞107頁、鼓詞115頁、子弟書120頁、快書121頁、竹板書122頁、牌子曲(雜牌子)123頁、群曲123頁、岔曲124頁
- (3) 入唐求法巡礼行記 円仁撰 文海出版社有限公司印行 中華民国60年7月初

版新台幣120元

- (4) 中国俗文学史 上・下 鄭篤著 商務印書館 中華民國54年6月発行
- (5) 中国文学史 明倫出版社編輯部 民国58年5月
- (6) 和漢朗詠集・梁塵秘抄 川口久雄・志田延義 岩波古典大系本 昭和44年5月30日
- (7) 敦煌石室講經文研究 国立台湾大学文史叢刊 邵紅著 中華民國58年
- (8) 方丈記研究 翁蘇倩卿著 源流出版社 民国69年11月8日
- (9) 仏教高僧辞典 スタンフォード・フーバ東亜図書館蔵
- (10) 入唐求法巡礼行記の研究 1・2・3・4巻 小野勝年著 財団法人鈴木学術財団 昭和39年2月24日
- (11) 方丈記 細野哲雄校註 朝日新聞社発行 昭和45年8月20日
- (12) 敦煌變文集 上・下巻 曾毅公等編 1957年出版 スタンフォード・フーバ東亜図書館蔵
- (13) 唐詩朗誦《録音帶》C-64 丘變友編採 東大図書公司発行
- (14) 唐詩朗誦《テキスト》 第一部分…古体詩朗誦説明・第二部分…近体詩朗誦説明 丘變友採編 東大図書公司発行 中華民國68年8月修訂版

討議要旨

発表者は発表時に唐流の朗唱を再現したものをテープで流したが、このことにつき、臼田座長から、もし、この朗唱と「梁塵秘抄」の今様とのうたい方が似ているようなら両者に影響関係を指摘することも可能になるが、福島和夫氏はどう考えるかとの質問があった。福島氏より「梁塵秘抄」などの譜は残っていないので比較できない。しかし琵琶の譜が催馬楽あたりが残っているので、それから音の移り変りをみると、現在我々の知っている唐楽とは音の移り変りが違うように感じる。今聞いた音も、唐というより、もっと新しい時代の音のように感じるとの返答があった。